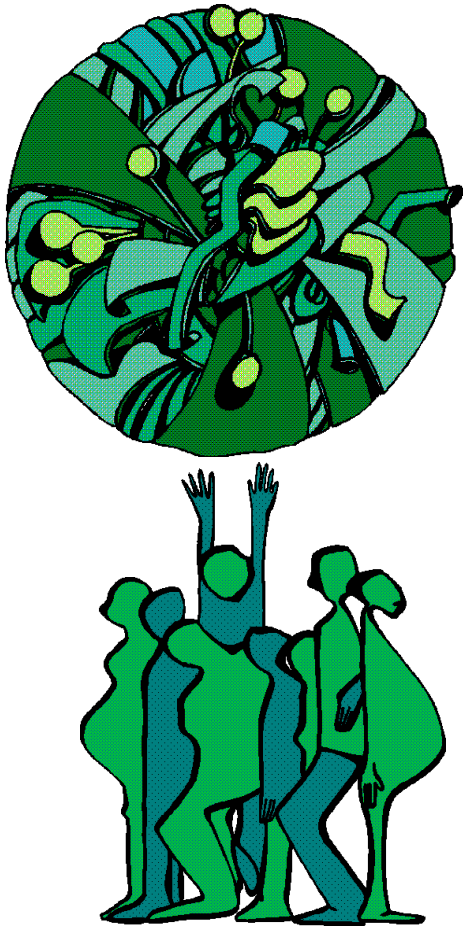
第2回多文化共生シンポジウム

保存版

川口市の
“となりの外国人に訊いてみよう！”

～日本人住民と外国人住民の多様性を
活かした元気な川口のまちづくり～



川口市にはたくさんの外国人が暮らしています。
共に生きる社会を目指すために私たちに求められることはなんでしょう？

令和3年 川口市 市民活動助成事業
「多文化共生シンポジウム」に基づき作成

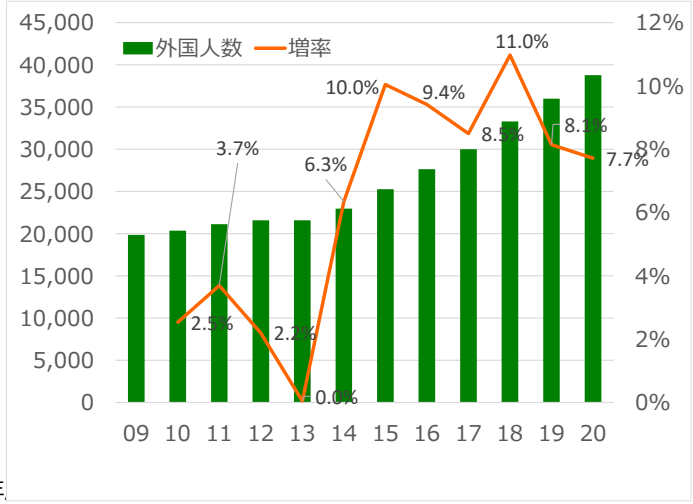
特定非営利活動法人
ＮＧＯ多文化共生協働センター・川口
2021年度版

川口市の外国人住民について

川口市にはどのくらいの外国人が暮らしているのでしょうか

1 川口市の外国人推移と増率

単位：人　　令和3年1月1日現在



年

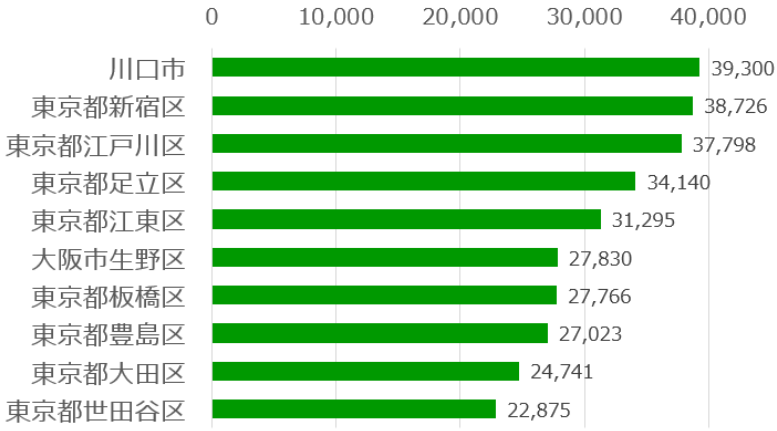
2 外国人の国籍別内訳

令和3年1月1日現在

	国籍	人数(人)	比率
1	中国	22,386	57.5%
2	ベトナム	4,187	10.8%
3	韓国	2,774	7.1%
4	フィリピン	2,602	6.7%
5	トルコ	1,742	4.5%
6	その他	5,254	13.5%
	合計	38,945	100%

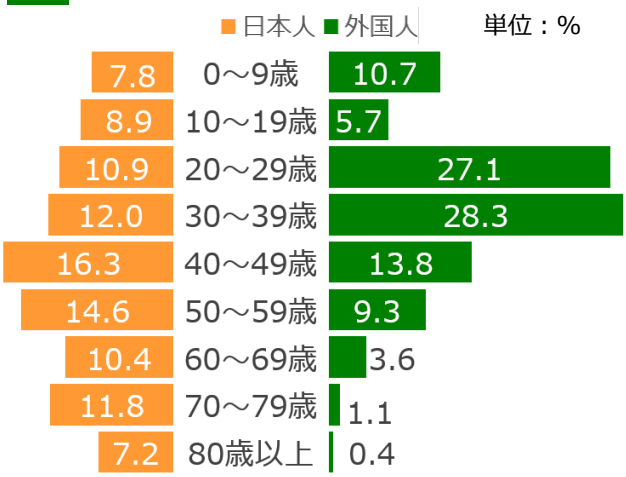
3 在住外国人総数上位10自治体

令和2年12月現在　単位：人



4 年齢構成の分布

令和3年1月1日現在



統計でみる川口市の外国人

1 川口市に住む外国人は毎年増えている。東日本大震災で2012年は増率がゼロになるが、2013年以降は急増している。

2 川口市在住外国人の半数以上は中国人。次はベトナム人。国籍別にはベトナム人が増えている。

3 外国人在住の自治体単位人数では、川口市は全国１位。

4 年齢構成で観ると、川口在住外国人は20代～30代が多い。日本人は半数以上が40歳代以上で、年齢構成が逆転している。

出典：川口市市民生活部協働推進課データ

第2回多文化共生シンポジウム
を開催しました。

«多文化共生のシンポジウム内容»

◆開会挨拶　峰久　節子 NGO多文化共生協働センター・川口 理事長

◆基調講演　「日本社会の異文化受容力はどれくらいか？」
埼玉大学　中本 進一教授

◆講演　「川口市の多文化共生の現状」
川口市市民生活部協働推進課　竹内 和寿氏

「多文化共生とSDGｓ」
JICA 東京 埼玉デスク 矢田部 建佑氏

◆パネルディスカッション

コメンテーター　中本 進一教授

パネリスト　李 国貞 (リ・ コクテイ)氏：中国　ＩＴ技術者
マリア・レー・ティ・ラン氏：ベトナム 川口教会シスター
鄭 錦伊（チョン クミ）氏：韓国 NPO 法人 JIN 愛育センター代表
メメット・ユジュル氏：クルド 日本クルド文化協会及びクルド赤新月社元代表

アドバイザー　青木 克浩:NGO多文化共生協働センター・川口 副理事長

中本進一教授

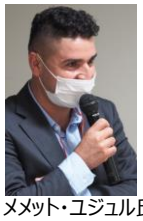
竹内和寿氏

矢田部建佑氏

李国貞氏

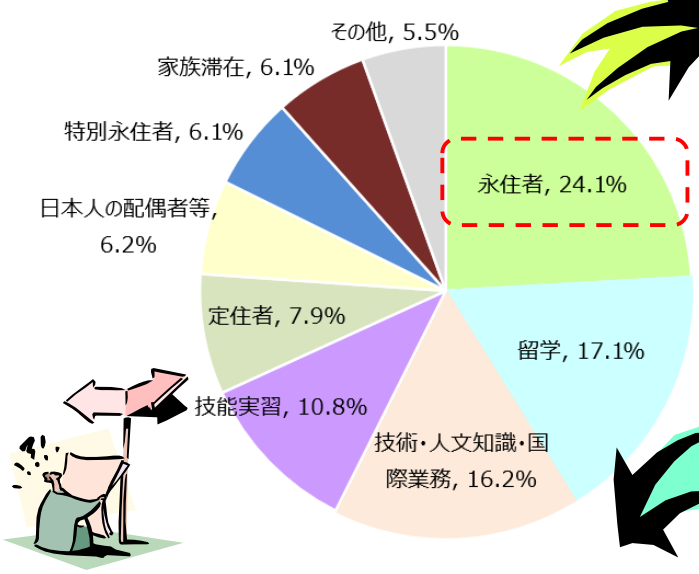
マリア・レー・ティ・ラン氏

鄭 錦伊氏


メメット・ユジュル氏

「日本社会の異文化受容力はどれくらいか？」

【日本の在留資格別外国人構成比】



■既に永住者の構成が最も高い。
・高齢化が進む永住者
・留学、就労ビザ・・・と続く

■多文化共生を考えるうえで重要な生活面の3局面

職業生活 **日常生活** **社会生活**

■彼らの生活を「自己効力感の高低」と「帰属対象の多様性」で考えるべき

※「自己効力感の高低」と「帰属対象の多様性とは」

■自己効力感の高低：受け入れられているという実感と自分が職業、家族、社会生活において役に立っているという充実感。

■帰属対象の多様性：私的生活の中のアイデンティティに加え、公的生活でのアイデンティティ。帰属対象とは心のよりどころとなるグループのこと。

■日本に住む外国人で「自己効力感の高低」×「帰属対象の多様性」が高い人がどれだけいるだろうか？これからは外国人の視点に立ち、生活側面をより深く考えることが問われてくる。

多文化共生を考える際の日本社会での3生活局面
→ 職業生活 / 日常生活 / 社会生活
⇔
自己効力感の高低
×
帰属対象の多様性

【欧州評議会が策定した　Intercultural Citiesのアプローチ（段階モデル）】

段階モデル		内容
1	無政策	移民やマイノリティは都市にとっては重要ではない、一時的な現象とみなされている。
2	外国人労働者政策	移民はいずれ出身国へ帰る一時的な労働者とみなされ、政策は短期的なものとされる。
3	同化政策	移民やマイノリティは永続的なものと受け止められているが、受入社会の文化的規範との相違は奨励されない。
4	多文化主義政策	異なる民族の文化を等しく尊重し、共存を積極的に図っていこうとする政策。
5	文化間対話政策	移民が受入社会の文化的規範との相違を保持する権利は法律や制度で認められており、共通基盤、相互理解を生み出す政策が奨励される。

多文化共生について考えよう

川口市に暮らす外国人と共に生きる社会を目指すには

多文化共生とは
国籍や民族などの異なる人々が、互いの文化的ちがいを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていくこと
（総務省　多文化共生推進委員会2006）

川口市として多文化共生の指針を出しています

«川口市の基本理念»　第2次川口市多文化共生指針より
～日本人住民と外国人住民の多様性を活かした元気な川口のまちづくり～

«施策展開»

1.コミュニケーション支援
2.生活支援
3.多文化共生の地域づくり
4 地域活性化やグローバルへの貢献

具体的なアクションとして、“多言語ボランティアの増員”などに取り組んでいます。

川口市に外国人が多く暮らす理由

- 川口は元々鋳物工場が多数あり、そこでは以前から外国人の労働者が多く働いていた。
- 川口は家賃が安くて都心への移動が便利。
- 家族・親族や仲間を呼び、徐々にコミュニティ化が形成されている。
- 外国人向けの施策やボランティアが充実している。

など

多文化共生とSDGs

【埼玉県におけるJICA事業の特徴】
埼玉県内の様々な企業や団体とのパートナーシップを通じて、途上国・世界の安定と発展、並びに県内の活性化に貢献する。

埼玉県の活力と経験を活用

●草の根技術協力
埼玉県企業局：水道事業人材育成事業（タイ/ラオス）
●研修員受入事業
中外油化学工業株式会社(八潮市)
長期研修インターン受入

大学×教育委員会/センター知見とネットワーク活用

●埼玉モデル（開発教育の推進、グローバル人材育成）
埼玉大学×埼玉県教育委員会×埼玉県教育センター　等

県内企業が保有する優れた技術を活用

●中小企業・SDGsビジネス支援事業
メトラン(メキシコ)新生児人工呼吸管理改善
コモテック(モンゴル) 黒煙低減計画産業　等

NPO/NGO、自治体、等をネットワーク化

●JICA連携事業情報交換会埼玉NGOネット
埼玉県県民生活部国際課との協働。　等

グローバルで活躍する人材を育成

●埼玉県教育委員会／埼玉県教育センターとの連携
埼玉版アクティブ・ラーニング型授業による教員研修

SDGsとは「Sustainable Development Goals（持続可能な開発目標）」の略称です。2015年9月の国連サミットで採択されたもので、国連加盟193か国が2016年から2030年の15年間で達成するために掲げた目標です。

パネルディスカッションからのメッセージ

☆☆中本教授が４人のパネラーにそれぞれの意見や思いを伺いました。☆☆

１.日本で暮らして初めて分かった習慣や文化の微妙な違い

・挨拶やお礼の仕方も日本・中国は微妙に異なる。：おはようのような日本語のようにマナーだけの挨拶は中国語にはない。
（中国の挨拶は”ご飯食べた？”等の具体的意味を持つ）
・中国人は声が大きくてストレート。日本のような遠まわしな言い方をしない。割り勘習慣もない。しかし家族と友人との関係はとても大切にする。
・川口には多くの中国人が住んでいるが、生活習慣このような違いがあることを伝えたい。

２.ベトナム人留学生・技能実習生、コロナ感染症の影響と生活支援

・コロナ禍によりベトナムの留学生や技能実習生の生活はとても厳しいくなっており、多くの若者からSOSが出された。
⇒家賃を払えず、食料も無く困窮する若者が多数。母国にも帰れない。
・必死の思いで日本に来ている技能実習生に対する理解と、受入れ環境について改善して欲しい。受入れる側の責任と、日本の社会を支えてくれているという認識が必要。

３.在留外国人の高齢化と教育について

・外国人の高齢化は既に重要な社会的課題。そのために外国人の老人介護を目的に2013年にNPOを設立。現在は韓国人、中国人、日本人とチームを組み介護事業を川口で展開中。高齢化が進むと母国の言葉と食事がまさに“命を繋ぐ”ことになる。
・子供の学校生活や教育にも戸惑うことが多い。だれにどう相談したらよいのか？
学校に相談に行っても“外国人”だからという偏見を受けることがあり、日本は「型にはめる」傾向が強いと感じる。

４.クルドの現状について（アイデンティティと言語）について

・川口に15年間住み、2012年に日本クルド文化協会を設立する。
2016年にトルコで政治的な事件が起きてからは日本でもクルドとしての文化交流活動が難しくなった。
・クルドは今でも母国が無く、言葉も様々な言語※で生活をしており、アイデンティティの維持が難しい。　※クルド語、トルコ語、日本語など
日本での生活に（日本人と）距離感も感じるが、トルコでのクルドに対する政策（同化策）は比較にならないほど厳しい。この現実に目を向けて日本も世界に発信して欲しい。

シンポジウムのアンケートより

シンポジウムにご聴講頂いた皆さんのアンケートより、多文化共生に関する様々なご意見を頂きました。
下記にアンケートのコメントを抜粋しました。

■ニュースできくベトナム人・クルド人の情報を生で聴くことができた。何に困っているのかどう交流すべきなのかを知ることができました。

■パネルディスカッション生の声を聴くことができ学びとなりました。
看護師を目指す身として文化の違いや価値観、国の違いだけでなく、個々人に違いがあり共存していくべきなんだなと感じました。

■川口市がこれだけいろいろな国からの方々と市民として生活していっているので、市として"多文化共生の日"多文化共生の曜日"などで、一般の方へも意識を高める機会をみんなで作っていくというアイデアはいかがでしょうか？

■川口市の特性、取り組みを通して多文化について考える機会になりました。他地域に住む者も知るべきことと思います。

■身近に感じて市民一人一人の意識の連帯をいろいろなアイデアで少しずつすすめたいですね！！ 引き続きのシンポジウムを期待します！

ご来場、オンライン参加ありがとうございました。

特定非営利活動法人
ＮＧＯ多文化共生協働センター・川口
お問合せ：090-4009-9501（事務局 中村）
tabunkasympo152011@gmail.com

令和３年11月20日　発行
https://tabunka51kawaguchi.jimdofree.com/